

放送 毎週木曜日 21:30~21:45

ラジオNIKKEI

虎ノ門医学セミナー

～より良い地域連携医療をめざして～

企画・制作：虎の門病院・医師と団塊シニアの会
提供：総合メディカル株式会社



よい医療は、よい経営から

総合メディカル株式会社

2016年9月15日放送

「皮膚悪性腫瘍の診断のポイントと治療」

虎の門病院 皮膚科

大原 國章

今日は皮膚がんの診断と治療についてお話しします。

皮膚がんは胃癌や乳がんなどと比べると、発生頻度はかなり低いために、一般的にはあまり注目されていないかもしれません。けれども最近では、紫外線の影響や人口の高齢化に伴って、年々増える傾向にあります。皮膚がんはその性質上、皮膚の表面に発生して、目に見えるという特徴があるわけで、内視鏡やMRIなどの検査をしなくても早期に見つけることが可能です。早期発見、早期治療が癌治療の根本であることは皆さんご承知のとおりですね。そこで、皮膚癌のうちの代表的な病気について、早期発見のポイントを解説します。

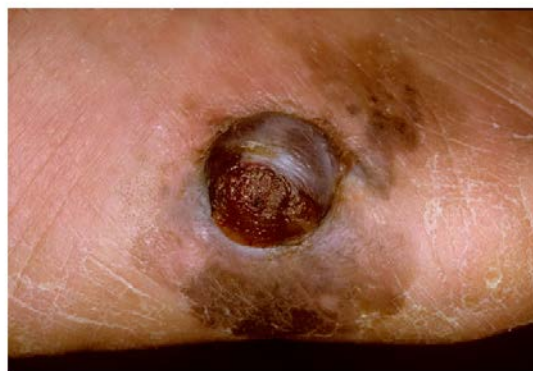
さて、皮膚がんと一口に言っても、いくつかの種類があり、それぞれに見た目や形が違ってきます。経過の早いものも遅いものもあり、生命的予後・つまり命取りになるかどうかにも違いがあります。このような違いは、癌細胞の性質によるところが大きいのです。癌細胞を顕微鏡で観察した時に、その癌細胞が皮膚のどの細胞に似ているかによって皮膚がんの種類、つまり診断が決まってきます。メラニン色素を作る細胞と似ていれば、メラノーマ・悪性黒色腫ですし、皮膚の表面を構成する細胞と似ていれば有棘細胞癌ゆうきよくであり、表皮と真皮の境に位置する細胞に似ていれば基底細胞癌、汗をつくる細胞と似ていればPaget病などの汗腺癌ということになります。そして、どの癌なのかによってできやすい場所、つまり好発部位が違います。大雑把に言って、メラノーマは足の裏や、手足の爪、高齢者の顔にできやすく、有棘細胞癌は顔や手といった露出部、基底細胞癌は顔の中心部分、Paget病は男女を問わずに陰部が好発部位となります。年齢に関しては、いわゆる癌年齢、中高年の方に多いですが、メラノーマの場合は20歳代、30歳代といった若い年齢層

にも決して少なくないので、注意が必要です。

これからいよいよ本題に入ります。

メラノーマは先程述べましたように、メラニン色素を作る性質があるので、ほとんどの場合は黒い斑点あるいは黒いかたまりとして発生してきます。メラノーマの発症経過は、様々な色が混じりあった、いびつな形の斑点として始まり、ゆっくりと大きくなって、数年の経過ののちにはしこりや塊が発生してきます。メラノーマは進行が速くて、転移を起こしやすいと言われていますが、実は早期癌の時期は案外と長くて、5年10年のことも珍しくありません。ですから早期癌のうちに見つけてしまえば、治せる病気なのです。けれども、しこりや塊を作るようになると、進行速度は速く、生命予後も危険になります。したがって、早期発見がとても大切ですし、注意していれば自分で見つけることも不可能ではありません。しかし、ここで注意しておかなければいけないことは、黒ければすべてメラノーマとは限らないということです。

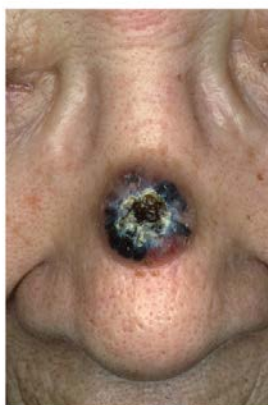
ホクロや、加齢に伴う老人性^{ゆうぜい}の疣贅やシミ、あるいは後で述べる基底細胞癌なども黒いことが多く、専門家さえ診断に迷うことがあるくらいです。典型的な症状であれば、経験のある皮膚科医なら目で見ただけで診断が可能ですが、早期の小さい病変の場合は肉眼的な診察だけでは難しいこともあります。そこで診断に役立つのは、ダーモスコピーという器械です。これは一種の拡大鏡ですが、虫眼鏡と違って、皮膚の内部まで観察できるので、ホクロやシミとメラノーマを見分けることが可能です。小さな手持ちの器械ですから、診察室でそのまま検査ができてとても便利です。



悪性黒色腫：
色素斑の中に黒いかたまり(結節)が発生している。
その一部は、皮膚がむけて赤くただれている。

次は基底細胞癌について話します。

この病気は癌という名前でも呼ばれることもありますが、基底細胞上皮腫という名称もしばしば使われています。その理由は、本当の意味での癌と違って、リンパ節や内臓に転移して、生命をおび



基底細胞癌：

中心が潰瘍化した、盛り上がり。
周りは黒い点で取り囲まれている。

やかすことがほとんどないからです。けれども、進行すると周囲にひろがり、皮膚を破壊して、深い潰瘍を作るという点で悪性の性質を持っています。顔の中央部分、目や鼻、口の周囲に好発しますので、進行すると鼻が溶けたり目がつぶれることさえあるくらいです。症状としては、初めのうちはゴマ粒のような黒い小さな点ですが、ゆっくりと大きくなって盛り上がってきます。饅頭を半分に切ったようなふくらみになることもあり、その中心が崩れて潰瘍化し、月のクレーター、あるいは火山の噴火口のような窪みになることもあります。ホクロと違って、摘むと硬く触れますし、表面は老人性の疣贅ゆうぜいのようなざらつきはなくて、つるつとした感触です。表面の皮膚は癌細胞で持ち上げられるために剥がれやすく、顔を洗ったり、タオルで擦ったりすると血が滲みます。基底細胞癌はこれ以外にも、色々なタイプがあり、潰瘍・えぐれが目立つタイプ、黒ゴマを撒いたように拡散するタイプ、いびつな形にただれるタイプ、てかてかした平べったいしこりになるタイプなどバラエティーに富んでいます。このような色々なタイプだとしても、先ほどお話したダーモスコピーを使えば、基底細胞癌に特徴的な症状を見つけることができますので、大きさが 2 ミリ程度であっても診断を付けられようになってきました。



基底細胞癌：

中心がえぐれて、周りは堤防のように縁取られている。

次は有棘細胞癌ゆうきょくのお話しです。

この癌は、皮膚の表面を作っている有棘細胞という細胞が悪性化したもので、疣贅のように盛りあってくるタイプと、皮膚がえぐれて潰瘍化するタイプがあります。盛り上がってくるタイプでも、初めのうちは表面がかさかさ、ざらざらしていますが、進行してくると赤くてかてかしてザクロを割ったような印象になります。癌の病変が大きくなると、リンパ節が転移のために腫れてきて、外からもぐりぐりがさわられるよう



有棘細胞癌：

皮膚の中から赤い固まりが飛び出している。

になり、さらには肺や肝臓などに転移してしまいます。そうなる前に治療したいものですね。



有棘細胞癌:

不規則な形の潰瘍。
縁取りには色が無い。

最後は Paget 病でしめくります。この病気は、汗を作る細胞が癌化したもので、おもに陰部に発生します。初期の症状はごくかすかな赤み程度ですので、あまり気に留めずに放っておかれる場合が多く、じくじくしたり、ただれたりしてから病院に来られることが普通です。発生部位が陰部なので、病変が下着や毛で隠れていること、つい恥ずかしい気持ちが先に立ってしまうためと考えられます。薬局で買った薬で一旦はかゆみなどが治まってもまた繰り返すような場合には、この病気を疑う必要があります。この病気は 5 年 10 年といった慢性の経過が多いのですが、長く放置しているとしこりや塊が出来てきて、ついにはリンパ節や内臓に転移してしまいます。



Paget 病: 赤い広がり、白っぽい部分。

さて、どのタイプの皮膚癌でも、眼で見ただけでかなりの確率で診断ができますが、微妙な場合には、うたがわしい部分を切り取って顕微鏡で細胞の検査をすることもあります。これを皮膚生検による病理検査と呼びます。超音波やレントゲン・CTなどは、癌かどうかの診断には直接関係しませんが、癌の広がり、深さ、転移のあるなしなどの情報には役立ちます。

以上で、症状の説明は終わり、最後に治療について話します。

どのタイプの癌であっても、基本となる治療は手術です。小さくて初期の段階であれば、切り取って皮膚を縫う外来手術ですみますが、癌の大きさ、出来た場所によっては皮膚を切り取った部分を治すのに工夫が必要となります。患者さん自身の健康な部分の皮膚を移植する植皮手術、あるいは周りの皮膚を捻じったり、回転させたり、スライドさせたりし

て修復する方法です。特に顔にできやすい基底細胞癌では、眼や口がひきつれないように、きれいに治さなければなりません。そして、癌を切り取るにしても、その大きさ、出来た場所、癌の進行具合、患者さんの年齢、何か持病があるかどうかなど、いろいろな条件を考慮に入れて、一人一人の患者さんに見合った手術を計画します。また、リンパ節転移を来している状況では、転移しているリンパ節を根こそぎ取り除く手術を行うこともありますし、条件によってはむしろ抗癌剤や放射線治療を優先することも考慮します。治療を優先するあまりに、患者さんに過大な負担を強いるのは避けるべきです。そして、きわめて早期の癌であれば、外来通院で治療できる外用薬、付け薬もありますし、液体窒素による凍結治療、レーザーなどを選ぶことも可能です。